



## 書評部門 最優秀賞

木嶋磨以伎さん 人間発達環境学研究科 修士課程1回生

『友だちリクエストの返事が来ない午後』小田嶋隆著 太田出版

### 「コミュニケーション至上主義」からの脱却

「大」学に入ったらたくさん友だちを作りましょう」と、入学したての頃に何回かアドバイスを受けた。友だちが多くなるほど視野が広くなり、また、豊富な人脈は社会に出てからも役立つのだという。私感を述べて、自らの将来のために仲間を作るという発想は、わりと利己的であるように思えてならない。しかし、「友だち」という言葉は無条件にポジティブなイメージを想起させ、多少がめつい意図が見え隠れする文言でさえも耳障りよく装飾してしまう。逆に言うと、「友だち」の概念を斜に構えて見つめれば、今まで見えてこなかった綻びを発見できるかもしれないのだけれど、記号的に「良い」とされているものを解体していくのはなかなか難しい。多くの批判も浴びるだろうし。

だが、本書はわざわざその作業に取り組む。友だちをテーマにする24編のコラムが収録されてあるのだが、一般的な友情礼賛に着地するものはひとつもない。どれもが既存の美談をスクラップにしてしまうような内容である。薄々感づいてはいたのだけれど、無意識のうちに目を背けてきたようなことを、精緻な文章で華麗に指摘する。次第に、脳内に漠然と存在していた美しい友情のストーリーがフェードアウトする。だが、不思議と不愉快な気持ちにならない。ページを進めるたびに「友情とはかくあるべき」といったような圧力から解放されていくようで、気分が軽くなる。

最近、就活からJ popの歌詞まで、何かと協調性が重要視されている場面に出くわす。集団からあぶれた者のために、「ぼっち」「コミュ障」などの蔑称がスタンバイしている。そんなコミュニケーション至上主義ともいえる雰囲気はどこか窮屈に感じて、辟易している人も少なくないはずである。本書はそういった息苦しさを抱えている人たちに、ため息をつくことができる自由を確保してくれる。